

加減ニ關スル諸般ノ規則ヲ説明スルノ方法ヲ採レリ

第九十九條 犯罪ノ情狀ニ因リ總則ニ照シ同時ニ本刑

ヲ加重減輕ス可キ時ハ左ノ順序ニ從テ其刑名ヲ定ム

但從犯及ヒ未遂犯罪ノ減等其他各本條ニ記載スル特

別ノ加重減輕ハ其加減シタル者ヲ以テ本刑ト爲ス

一再犯加重

二宥恕減輕

三自首減輕

四酌量減輕

本條ハ總則ニ掲クル一般加重減輕ノ順序ヲ定ムルモノニ

シテ其加重減輕ヲ行フニハ先ツ從犯及未遂犯罪ノ減等其

他各本條ニ記載スル特別ノ加重減輕ヲ行フヲ必要トス

然ル後ニ至リ始メテ本條ノ順序ニ基キ加減スヘキ本刑ノ  
何タルヲ知ルヲ得ヘキナリ

夫レ斯ノ如ク從犯及ヒ未遂犯罪ノ減等ト各本條ニ記載ス

ル特別ノ加重減輕ヲ以テ本刑ヲ定ムルノ原素ト爲シタル

所以ハ他ナシ即チ此等ノ加重減輕ハ犯罪タル所爲ハ性質

ト輕重ヲ定ムル者ナレハナリ之ニ反シ再犯加重其他本條

ニ列記スル一般ノ加重減輕ハ犯人ノ情狀ニ原因スル者ニ

過キサルヲ以テ本刑ヲ定ムルニ直接ノ關係ヲ有スルヲナ

キナリ

本條ハ草案ト大ニ其規定スル所ヲ異ニセリ曩ニ重罪輕

罪違警罪ノ別ヲ説クニ方リ述ヘタル如ク起草者ノ説ニ

從ヘハ從犯未遂犯其他宥恕若クハ自首減輕ノ如キハ各



條ニ記載スル特別ノ者ト雖モ重罪ヲ變シテ輕罪ト爲ス  
 ノ効力ヲ有スル者ニ非ス其罪ノ重罪又ハ輕罪タルヲ知  
 ルニハ法律上刑ヲ減輕シタル理由ヲ探究スルヲ必要ト  
 ス若夫レ犯罪ヲ構成スル原素ハ多寡又ハ其輕重ニ依テ  
 刑ヲ減等スルモノナリトセハ即チ本刑ト共ニ罪質ニ影  
 響セサルヲ得ス即チ例ヘハ貨幣偽造罪ノ場合ニ於テ或  
 ハ外國ノ貨幣又ハ內國通用ノ銅貨ヲ變造シタルニ過キ  
 サル等ノ理由ヨリシテ輕罪ノ刑ヲ科スル場合少ナカラ  
 ス此等ノ場合ニ於テハ立法者ハ先ツ完全ナル最モ重キ  
 貨幣偽造罪ヲ定メ然ル後ニ於テ其包含スル諸種ノ元素  
 ナ欲クニ從テ刑等ヲ定メタル者ナレハ即チ罪自テノ輕  
 キニ基ク本刑トス之ニ反シテ重罪ヲ犯シタル者幼者ナ

從犯未遂  
犯ノ減等

ルカ又ハ自首シタルカ爲メニ重罪ニ非スト云フノ理ナ  
 シ又重罪ノ從犯又ハ未遂ト云フヲ以テモ自ラ其重罪タ  
 ルノ性質ヲ失ハサルヲ知ルヘシト(草案第四百四十八節  
 及第四百四十九節)此說固ヨリ有力ナラサルニ非スト雖モ  
 現行刑法ニ之ヲ採用セサリシコト本條ノ明文ヲ以テ一目  
 瞭然タリ故ニ刑法第一條ノ適用上ニ於テ從犯及未遂犯  
 ノ減等ト特別ノ宥恕減輕トノ効力重罪ヲ變シテ輕罪ト  
 爲スヲ得ルヲ證明スルニハ第一條ニ所謂「法律ニ罰ス  
 ヘキ罪云々」ノ明文ヲ外ニシテ尙本條ヲ以テ有力ナル理  
 由ト爲スコトヲ得ヘシ唯一般ノ宥恕ト自首減輕ニ付テノ  
 ミ專ラ第一條ノ明文ヲ以テ論據トス可キナリ

從犯未遂犯ノ減等ト各本條ニ記載スル特別ノ加重減輕ト



ト特別ノ  
加重トハ  
何レヲ先  
スヘキヤ  
論題ノ實  
用

同時ニ生シタル場合ニハ何レヲ先ニシ何レヲ後ニス可キ  
ヤ是全ク本條ニ決セサル一點ナリ固ヨリ減輕ノミ重復ス  
ル場合ニ於テハ其前後ヲ定ムルノ實用ナシト雖モ從犯未  
遂犯ノ減等ト特別加重ト同時ニ生スル場合ニハ其順序ノ  
前後ニ依リ刑ニ輕重ノ差ヲ來スコトナシトセス而シテ其輕  
重ノ差ヲ來ス所ノ者ハ何ソヤ曰ク重罪ノ刑ハ加ヘテ死刑  
ニ入ルコトヲ得ス輕罪ノ刑ハ加ヘテ重罪ニ入ルコトヲ得スト  
ノ條則即チ是ナリ(第六十六條及第七十條)此條則アルカ爲  
ノ刑ノ種類ニ依リ加重ヲ先ニスルト減輕ヲ先ニスルトニ  
付キ大ニ犯人ノ損益ニ關係スルコトアリ即チ例ハ本刑ニ  
シテ無期徒刑ナリトセン乎加重ヲ先ニスレハ加ヘテ死刑ニ  
入ルコトヲ得サルニ依リ結局減等スルノミニ止リ有期徒刑ニ

降ルヘシ又本刑ニシテ輕懲役ナリトセン乎加重ヲ先ニス  
レハ本刑ヲ變スルノ結果ヲ生セス(加重減輕共ニ同等ノ場  
合ト假定シテ)即チ前ノ場合ニ比スレハ不利益ナリトス之  
ニ反シテ減等ヲ先ニセン乎加ヘテ重罪ニ入ルコトヲ得サル  
ニ依リ重禁錮ノ刑ト爲ルヘシ(此結果ノ必然生セサルヲ得  
サル所以ハ通説ニ依レハ加ヘテ死刑又ハ重罪ノ刑ニ入ル  
コトヲ得ストハ唯加減相殺ノ結果トシテ其點ニ迄加重スル  
ヲ許サストノ意ニ非スシテ其點ニ迄ハ一切加重スルヲ許  
サ、ルノ意ナリトスレハナリ)  
或論者ノ説ニ曰ク右ノ場合ニ於テハ特別ノ加重ヲ先ニシ  
從犯未遂犯ノ減等ヲ後ニセサル可カラズ何トナレハ特別  
ハ加重ハ犯罪ノ事實ニ直接ノ關係アレハナリト余惟フニ



是誤謬ノ見ニ過キス固ヨリ前示ボアソナード氏ノ考案ニ  
 從〜ハ從犯未遂犯ノ減等ハ罪質ヲ變更スルノ効力ナキヲ  
 以テ此解釋ヲ下ス至當ナルヘシト雖モ既ニ立法者ハ草  
 案ニ從ハスシテ從犯未遂犯ノ減等ト特別ノ加重減輕トテ  
 同列ニ置キ何レモ本刑ヲ定ムル爲ニ行ハサル可カラサル  
 者トセリ又一步ヲ進メ從犯未遂犯ノ減等ハ果シテ犯罪ノ  
 事實ニ原因セサル者ナルヤ余ハ却テ疑ニ述ヘタル如ク犯  
 罪ノ事實ニ直接ノ關係アレハコソ特別ノ加重減輕ト並ヘ  
 テ之ヲ唯犯人ノ情狀ニ原因スル一般ノ加重減輕ト區別シ  
 先ツ其加減シタル者ヲ以テ本刑ト定メタル所以ト信スル  
 ナリ若果シテ然ラハ右ノ理由ヲ以テ特別ノ加重ヲ先ニセ  
 ノトスルハ解釋ノ權限ヲ超ユタル説ト云ハサルヲ得サル

加減相殺  
 ノ結果ト  
 シテ死刑  
 又ハ重罪  
 ノ刑ニ入  
 ルヲ許サ  
 ルノミ

ナリ  
 余惟フニ從犯未遂犯ノ減等ト特別加重トハ其等ノ低キ方  
 ヲ限界トシテ之ヲ相殺スルヲ至當トス故ニ右無期徒刑又ハ  
 輕懲役ノ場合ニ於テ加減共ニ例ヘハ一等ト假定スレハ本  
 刑ヲ變セサルヲ爲ルヘシ其理由ハ他ナシ即チ法律ハ此  
 二者ヲ同列ニ置キ一般ハ加重減輕ハ如ク特ニ一定ノ順序  
 ヲ示サレハナリ辭ヲ換ヘテ之ヲ言ヘハ加ヘテ死刑又ハ  
 重罪ノ刑ニ入ルヲ許サ、ルノ條則ハ一切加重ヲ禁スル  
 ノ精神ニ非スシテ唯加減相殺ハ結果トシテ之ヲ禁シタル  
 者ニ過キス又反對ノ明文ナキ以上ハ論理上然ラサルヲ得  
 カルナリ其故如何トナレハ現ニ刑若干等ヲ加減ス可キノ  
 原由アリトセハ假令ヒ其原由ノ性質相異ナリトスルモ十



「一」ノ理ト同シク加フヘキ者ハ之ヲ加ヘ減ス可キ者ハ  
 之ヲ減スルニ非サレハ實際加減シタル結果ヲ生セズ又加  
 減ヲ命シタルノ實ナキナリ其加減ノ前後ハ如何トシテモ  
 可ナリ結局加ヘテ死刑又ハ重罪ノ刑ニ入ルヲ得サルノ  
 條則チ破ラサル以上ハ加減ス可キ丈ケ加減スルヲ當然ト  
 ス其結果ヲ生スル迄ニ想像上假ニ死刑又ハ重罪ノ刑ニ入  
 ルニ何等ノ妨ケアラザヤ通常論者ノ説ノ如ク右無期徒刑ノ  
 場合ニ加重ヲ先ニシタルカ爲メ有期徒刑ト爲リ輕懲役ノ場  
 合ニ減等ヲ先ニシタルカ爲メ重禁錮ト爲ル如キハ論理ノ  
 許サ、ル所ニシテ又幸ニ斯カル加減ノ方法ヲ用ユヘシト  
 ノ明文ヲ見ヌ加ヘテ死刑又ハ重罪ノ刑ニ入ルヲ許サ、  
 ルノ條文ハ決シテ斯ノ如キ結果ヲ生セシムルノ目的ヲ以

一般ノ加  
 重減輕モ  
 亦加減相  
 殺スルヲ  
 得ヘキヤ

テ之ヲ設ケタル者ニ非ス余ハ却テ其本旨ニ悖戾スル者ト  
 信スルナリ  
 然リト雖モ一般ノ加重減輕ハ本條ニ其順序ヲ定メタルヲ  
 以テ奇ナル結果ヲ生スレトモ右ニ述ヘタル加減法ヲ行フ  
 一ヲ得サルヘシ即チ一切相殺ヲ爲ス一ヲ先ツ再犯加重  
 シテ其生シタル刑ヲ遞次ニ減輕スルト爲ルヘシ故ニ例  
 ヘハ無期徒刑ヲ以テ罰スヘキ罪ヲ犯シタル者同時ニ再犯ニ  
 係リ且宥恕減輕ヲ受ク可キ者ナル時ハ再犯者ニ非サルト  
 同シク唯減輕ノ利益ヲ得テ有期徒刑ニ處セラレ、一ト爲ル  
 ヘシ之ニ反シ本刑輕懲役ニ係ル場合ニハ輕罪ノ刑ニ降ル  
 一ナク順次ニ加減シテ依然本刑ヲ變セサル一ト爲ルヘシ  
 余ノ公平ト信スル相殺法ヲ行ヘハ此最後ノ結果ハ敢テ奇



一般加重  
減輕ノ順  
序及其理  
由

怪トスヘキニ非スト雖旧前例無期刑ノ場合ニ比スレハ犯  
人ノ不利益ニシテ權衡ヲ失スルコト明白ナリト云フヘシ  
今ヤ一步ヲ進メ本條ニ一般ノ加重減輕ノ順序ヲ定ムルニ  
方リ何故ニ再犯加重ヲ先ニシ宥恕減輕ヲ後ニシタルヤト  
云フニ全ク深キ理由アルコトニ非スト考フ同シク一般ノ加  
重減輕タル以上ハ其間ニ前後ノ別ヲ立テス加減相殺シテ  
唯其結果ノミ死刑又ハ重罪ノ刑ニ入ラシメサルコトニ定メ  
タル方至當ナリシヲ信スルナリ  
自首減輕ヲ宥恕減輕ノ後ニ置キタル所以ヲ察スルニ即チ  
自首ハ犯罪後ニ生スル事實ニシテ犯罪自身ニハ減輕ス可  
キノ情狀ヲ帶ヒス唯政畧上ヨリ設ケタル一種ノ減輕法ニ  
過キサルヲ以テノ故ナルヘシ然レモ是亦理論上批難ヲ免

カレサル一點ナリ犯罪自身ニ減等スヘキ情狀ヲ帶ヒサル  
者ナレハ尙更加減相殺スヘキヲ至當トス其然ル所以ハ再  
犯加重ヲ先ニスルノ結果ハ主トシテ本刑無期刑又ハ長期  
ノ輕罪ノ刑ニ係ル場合ニ於テ犯人ニ加重ヲ受ケスシテ唯  
減等ノ利益ヲ得セシムルニ在リ果シテ然ラハ其減輕スヘ  
キ理由微力ナルニ從テ益々加減相殺ヲ嚴重ニ行ヒ輕キニ  
失スルノ弊ヲ防クヲ必要トス唯其相殺ノ結果上ニ於テ加  
ヘテ死刑又ハ重罪ノ刑ニ入ルコトナキヲ以テ足レリトスヘ  
キナリ  
酌量減輕ヲ最後ニ置キタルコトニ付テハ一理ナキニ非ス即  
チ酌量減輕ハ判官ノ權内ニ於テ隨意ニ行フ者ナルニ依リ  
先ツ法律上ノ刑定マリタル後ニ非サレハ果シテ之ヲ與フ



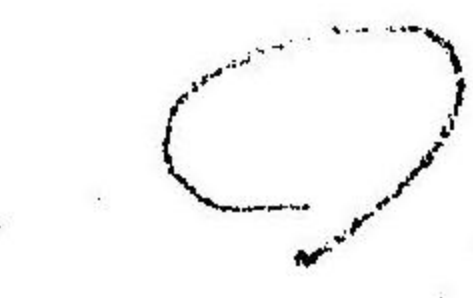
可キヤ否ヤヲ判斷スルノ難キ事情ナシトセサレハナリ  
 尤モ加重ヲ先ニシテ酌量減輕ヲ後ニスルモ被告再犯者ニ  
 シテ唯加ヘテ死刑ニ入ルヲ得サルノ條則アルカ爲メ實  
 際加重セサリシ如キ場合ニ於テハ容易ニ酌量減輕ヲ與フ  
 ルヲナカルヘシ加減相殺ノ法ナキモ實際ニ不都合ヲ見ル  
 一ナキヲ信ス然レモ法律上ノ減輕ニシテ尙相殺ヲ至當ト  
 スル以上ハ酌量減輕ヲ行フ場合ニ於テハ一層相殺ヲ必要  
 トシ唯結果上加ヘテ死刑ニ入ルヲ許サ、ルヲニ定メタル  
 方其宜シキヲ得タリシニハ非サルヤ

第七節 數罪俱發處分

數罪俱發  
 ト再犯加  
 重トノ差  
 異

刑罰ハ數人一罪ヲ犯シタル場合ニ於テ大ニ其適用ヲ異ニ  
 スルヲ前編第六章ニ之ヲ詳述シタルカ如シト雖モ一人  
 數罪ヲ犯シタル場合ニ於テモ亦著ルシク其適用ヲ變スル  
 者トス是即チ數罪俱發例ノ因テ起ル所以ナリ  
 數罪俱發トハ一人ノ者二個以上ノ罪ヲ犯シ其一ニ付テモ  
 未ダ確定裁判ハ存セサル状態ヲ云フ故ニ數罪俱發ト再犯  
 トノ差別ハ即チ其確定裁判有無ノ一點ニ在リトス(我刑法  
 第百條第一項ニ未ダ判決ヲ經ス云々ノ判決ハ確定裁判ト  
 解セサル可カラス)但一罪ニ付キ確定裁判ノ下リタル後ニ  
 再ヒ數罪ヲ犯シタル時ハ同時ニ再犯加重例ト數罪俱發例  
 ノ適用ヲ生スヘシ  
 再犯ノ場合ニ於テハ初犯再犯共ニ其本刑ヲ科シ尙再犯ノ





數罪俱發  
ノ所分  
併科法

故ヲ以テ再犯ノ刑ヲ加重ス此二箇ノ結果ハ數罪俱發ノ場  
合ニ併セテ之ヲ適用ス可カラサルヲ古來嘗テ異論ナキ  
一點ナリ其理由ハ他ナシ數罪俱發ノ場合ニ於テハ犯人傾  
惡ノ事實蔽フ可カラスト雖モ未タ懲戒ヲ嘗メサルヲ以テ  
公然社會ニ寇シタル者ト云フヲ得ス又社會ニモ懲罰ヲ遲  
滯シタルノ過失ナシトセス故ニ右併科ト加重ノ二ヲ行フ  
可カラサルハ當然トス然レトモ其一ハ之ヲ行フニ必要ナ  
ルヤ是即チ數罪俱發處分ノ立法ニ關スル至大ノ問題ナリ  
トス

數罪俱發ヲ處分スルニハ左ニ列記スル三個ノ方法アリ

(一)併科法 嚴格ナル理論上ヨリ言ヘハ各罪ニ其刑ヲ科ス  
ヘキハ當然ナル如シト雖モ數罪俱發ハ各罪ヲ別物トシテ

△

其輕重ヲ定ムヘキ者ニ非ス其數罪ナル者ハ互ニ連絡シテ  
其間ニ密附ノ關係ヲ存スルモノトス其故他ナシ犯人ハ往  
々一時ノ勢ニ乘シ己レヲ制スル能ハサルヨリシテ累犯ス  
ルト多キヲ以テ其情狀恕ス可キ所ナキニ非ス且前示初犯  
處分ノ遲滯シタルト或ハ其累犯ヲ促スノ媒介ト爲リタル  
ヤ知ル可カラス要スルニ罪數ヲ加算シタルノ結果ヲ以テ  
罪惡ノ度ヲ表彰スル者トスルハ大ニ公平ヲ失スルモノト  
云フヘシ殊ニ其各刑併科ノ結果タルヤ實ニ殊酷名狀スル  
ニ忍ヒサルモノアリ即チ若其主義ヲ貫カントスレハ禁錮  
罰金ト雖モ少シク犯數ヲ累スルニ於テハ無期ノ自由刑ニ  
變シ又ハ財産全部ノ沒收ト爲ルニ至ルヘシ是レ豈ニ刑罰  
適用ノ度ヲ得タル者ト云フ可ケンヤ又社會ノ安寧ヲ保ツ



ニ必要ナランヤ  
併科法ノ弊ハ唯此一點ニ止ラス死刑ト無期刑ハ之ヲ他ノ  
刑ト併科スル能ハサルニ依リ一般ノ場合ニ其適用ヲ見ル  
トナ得ス但死刑ト有期刑ト併科スルハ事實上能ハサル  
ニ非スト雖モ在獄ノ艱苦ニ次テ死刑ヲ執行スル如キハ殘  
忍无情今日ノ社會ノ容ル、所ニ非サルナリ  
右ノ理由ニ依リ純粹併科主義ハ今日ブレシル國ノ刑法(第  
六十一條)ヲ外ニシテ之ヲ採用シタル者アルヲ知ラス  
(二) 吸收法 此方法ハ數罪俱ニ發シタル場合ニ於テ一ノ重  
キニ從テ處斷スルヲ云フ故ニ併科法ニ反對シテ輕キニ失  
スルノ弊ヲ免カレヌ即チ一回重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ幾  
回ト雖モ之ト同等又ハ輕キ罪ヲ犯シテ毫モ損失スルコトナ

吸收法

シ是實ニ奇ナル結果ト言ハスシテ何ソヤ其罪惡ノ輕重ト  
權衡ヲ失シ社會ノ安寧ヲ維持スルニ足ラサルコト一目瞭然  
ト云フヘシ然ルニ我刑法ハ佛國刑法ニ倣ヒ此處分法ヲ採  
用シ一般ノ場合ニ於テ一ノ重キ刑ヲ科スルニ止メタリ(第  
百條第一項佛國治罪法第三百六十五條)是唯煩ヲ省クノ主  
意ニ出テタル者ニ過キス決シテ他ニ有力ナル理由アル者  
ニ非サルナリ  
吸收法ニ免カル可カラサル刑罰不充分ノ弊ヲ矯正スル  
ニハ實際最長期又ハ最多額ノ刑ニ處スルト酌量減輕ヲ與  
ヘサルトノ二方法アリ然ルニ此方法タル夫レ自ラニ不充  
分ナル外ニ尙其弊トシテ(一)數罪俱發ノ場合ニ限り之ヲ適  
用スルヲ得ヘキ者ニ非ス(二)最長期ナキ重罪ノ刑ニ之ヲ適



川スルヲ得ス(三)判官ヲ拘束スルノ力ヲ有セス故ニ其吸收主義ノ欠點ヲ補充スルノ効力頗ル微弱ナル者ト謂ハサルヲ得サルナリ

△折衷法

(三)折衷法 此方法ニアリ一ハ制限併科ニシテ又一ハ加重トス

近時歐洲諸國ノ刑法ハ舉テ吸收主義ヲ放棄シ折衷主義ヲ採用セリト雖モ其折衷法ハ各々相異ナリ或ハ最重刑ノ最長期ヲ限界トスル者アリ(魯國刑法第一百五十二條)或ハ更ニ最重刑ヲ加重スル者アリ而シテ其刑期ノ一部分ヲ附加スルヲ以テ判官ノ隨意トスルモノアリ又全ク其擅斷ニ委ネサルモノアリ又白耳義及獨逸ノ如キハ同時ニ最重刑ヲ加重スルト或程度ヲ限界トシテ各犯罪ノ刑ヲ併科スルト

ノ二方法ヲ利用シ刑ヲ區別シテ其加重スヘキ者ト併科スヘキ者トヲ定メ重大ナル刑ハ其最モ重キ者ヲ加重スルニ止メ禁錮ト罰金ハ限界ヲ定メテ之ヲ併科セリ而シテ其併科スル場合ハ勿論一ノ重キ刑ヲ加重スル場合ト雖モ判官ヲシテ罪數ノ多寡ヲ參酌シ一定ノ範圍内ニ於テ刑ヲ輕重スルノ自由ヲ得セシメタリ是蓋シ折衷主義ノ最上處分法トス(白耳義刑法第五十八條以下獨逸刑法第七十四條以下伊太利刑法草案第八十條以下葡萄牙刑法第八十七條)我刑法起草者ボアソナード氏ハ最重刑ヲ定ムルコトノ往々困難ナルヲ主タル理由トシテ制限併科法ヲ採用シ數罪俱發ノ場合十三個ヲ區別シテ各其科スヘキ刑ヲ示サレタリ(草案第一百十二條)是レ少ク煩ニ過クルノ弊ナキ能ハス遂



ニ吸收主義ニ勝テ制セラル、ニ至レリ  
 數罪俱發ニ二種アリ一チ形體上ノ數罪俱發ト云ヒ又一チ  
 想像上ノ數罪俱發ト云フ形體上ノ數罪俱發トハ各別ニ犯  
 罪ト爲ルヘキ數多ハ所爲チ行フチ云フモノニシテ想像上  
 ノ數罪俱發トハ同一ハ所爲ニシテ數多ノ犯罪ヲ包含スル  
 チ云フモノトス例ヘハ内亂ヲ起スニ當リテ殺傷放火強盜  
 等チ行フカ如キ是ナリ前述處分上ノ難題ヲ生スル純粹數  
 罪俱發ハ即チ形體上ノ數罪俱發チ云フモノト知ルヘシ想  
 像上ノ數罪俱發ハ數罪ノ名目ヲ有スト雖モ其實一ノ所爲  
 ニシテ數多ノ刑ニ觸ル、者ニ過キス是故ニ形體上ノ數罪  
 俱發ニ付キ吸收主義ヲ廢却シタル刑法ト雖モ想像上ノ數  
 罪俱發ハ一ノ重ニ依リ處分スルコトニ定メサル者ハ無キナ

リ(白耳義刑法第六十五條獨逸刑法第七十三條)  
 又數罪俱發ト混同ス可カラサル者ハ連續犯ナリ連續犯ハ  
 各自ニ罪ト爲ルヘキ所爲ヨリ成ル者ナリト雖モ目的ノ一  
 ナルニ基キ法律上一罪トシテ之ヲ罰スルニ過キス但實際  
 ニ於テ此二種ノ場合ヲ區別スルハ往々困難スルコトアルヘ  
 シ又吸收主義ニ基ク數罪俱發ノ處分法ニ於テハ此區別ノ  
 實用著大ナルヲ得ス然レモ學理上之カ區別ヲ明ニスルハ  
 頗ル肝要ノ點ト信スルナリ  
 數罪俱發ヲ以テ論スルニハ其罪ノ同種又ハ異種タルニ依  
 テ寸分ノ差別アルコトナシ何レモ罰セサル可カラサル者タ  
 ルコトハ論ヲ俟タス一罪ヲ犯シタル者ニ比スレハ其情狀必  
 ス重カラサルヲ得ス吸收主義ハ畢竟此差別ヲ度外視スル



ノ故ヲ以テ痛キ批難ヲ免カレサルナリ  
數罪俱發ハ又時ト場所ト異ニスルカ爲メ其處分ニ影響  
ヲ來スコトナシ但其内ニ期滿免除ノ期限ヲ經過シタルカ又  
ハ自國ノ法律ヲ以テ罰スルコトヲ得サル者アル時ハ無論此  
限ニ非ス

尙一ノ注意ヲ要スルコトハ數罪俱發ハ一時ニ發覺シタルト  
一罪前ニ發シ判決ヲ經テ餘罪後ニ發シタルトニ依リ其刑  
ノ輕重ヲ異ニスルコトアル可カラス我刑法ハ果シテ此原則  
ニ反スル所ナキヤ後ニ説ク所ヲ以テ之ヲ知ルヘシ  
以上數罪俱發ノ場合ト其處分ニ關スル理論ヲ述ヘタルヲ  
以テ以下簡略ニ我刑法ノ條文ヲ説明セントス  
我刑法ハ吸收主義ヲ採リ一ノ重キニ從テ處斷スルコトニ定

メタルヲ以テ先ツ第一着手トシテ其所謂最重刑ノ何タル  
ヲ明ニセサル可カラス若夫レ數罪共ニ常事犯ノ刑ヲ以テ  
罰ス可キ者ナルカ又ハ國事犯ノ刑ヲ以テ罰ス可キ者ナル  
時ハ殆ト困難ヲ生セス第六十七條及第六十八條ノ順序ニ  
依ルヲ得ヘシト雖モ數罪中ニ常事犯ノ刑ニ處ス可キ者ト  
國事犯ノ刑ニ處ス可キ者アル時ハ立法上最重刑ヲ定ムル  
ニ付テ深ク考ヘサル可カラス然ルニ我刑法ハ一般ニ重罪  
ノ刑ハ刑期ノ長キ者ヲ以テ重ト爲シ刑期ノ等シキ者ハ定  
役アル者ヲ以テ重ト爲スト定メタリ(第百條第二項)此條文  
ニ依レハ主トシテ刑期ノ長短ヲ見ルヘシ定役ノ有無ハ之  
ヲ問フノ必要少ナシトス故ニ無期流刑ハ有期徒刑ヨリ重  
ク有期流刑ハ重懲役ヨリ重ク重禁獄ハ輕懲役ヨリ重シト



大換言セハ立法者ハ獨リ第六十七條及第六十八條ノ區別  
 ナ斟酌セサルノミナラズ第七條ニ掲クル刑名ノ順序迄モ  
 之ヲ變動シタル者ト云フヘシ是大ニ批難ヲ免カレサル點  
 ナルヘシト雖モ右明文ノ存スル以上ハ解釋上又奈何トモ  
 スルニ由ナキナリ  
 輕罪ノ刑ハ其所犯情狀最重キニ從テ處斷ス(第百條第三項)  
 此條文ハ何ナル意義ヲ有スル者ナルヤ一目了解ニ苦マサ  
 ルヲ得ス思フニ輕罪ノ刑ハ刑期ノ長短ヲ以テ其輕重ヲ定  
 ムル能ハサル場合アリ短期ノ禁錮ヲ以テ常ニ多額ノ罰金  
 ヨリモ重シトスルハ不權衡ヲ免カレス又禁錮ト雖モ一年  
 以上三年以下ノ者アリ二月以上四年以下ノ者アリ又六月  
 以上二年以下ノ者アリ畢竟何レヲ重トシ何レヲ輕トスヘ

キヤチ知ルコトノ難キ場合アルヲ以テ裁判官ニ其輕重ヲ定  
 ムルノ權ヲ委任シタル者ニ外ナラズト信スルナリ  
 一罪重罪ニシテ又一罪輕罪ナル場合ニ付テハ特別ノ規定  
 ナキヲ以テ一般ノ原則ニ從ヒ重罪ノ刑ヲ以テ重キ者ト解  
 釋セサル可カラズ  
 違警罪二罪以上俱ニ發シタル時ハ各其刑ヲ科ス若シ重罪  
 又ハ輕罪ト俱ニ發シタル時ハ一ノ重キニ從フ(第百一條)違  
 警罪ニ限リ數罪俱ニ發シタル場合ニ於テ其刑ヲ併科スル  
 所以ハ主トシテ其刑輕キヲ以テ併科スルモ嚴ニ失スルノ  
 憂ナキニ在リ然レモ一旦吸收主義ヲ採用シナカラ唯刑ノ  
 輕キカ爲メ忽然其主義ヲ一變シテ反對主義ニ從フハ論理  
 ナ貴徹セサルニ似タリ拘留ノミナリトモ其併科ニ制限ナ



設クルヲ以テ至當ナリシト考ルナリ  
數罪同時ニ發覺シタル場合ニ於テ一ノ重キニ從テ處斷ス  
ルノ條則チ適用スルニハ何等ノ困難アルコトナシト雖モ一  
罪先ニ發シ既ニ判決ヲ經テ餘罪後ニ發シタル場合ニ於テ  
ハ多少困難ナキ能ハス是即チ第二百二條ノ設ケアル所以ナ  
リ

第二百二條 一罪前ニ發シ既ニ判決ヲ經テ餘罪後ニ發シ  
其輕ク若クハ等シキ者ハ之ヲ論セズ其重キ者ハ更ニ  
之ヲ論シ前發ノ刑ヲ以テ後發ノ刑ニ通算ス但前發ノ  
刑罰金科料ニ該リ已ニ納完シタル者ハ第二十七條ノ  
例ニ照シ折算シテ後發ノ刑期ニ通算ス  
若シ前發ノ罪ヲ判決スル時未ダ發セサル罪再犯ノ罪

ト俱ニ發シタル者ハ其再犯ト比較シ一ノ重キニ從ヒ  
前發ノ刑ヲ通算セズ

本條第一項ヲ説明スルニハ左ニ列記スル三箇ノ場合ヲ區  
別スルヲ要ス

(一) 後發ノ罪前發ノ罪ヨリ輕キ場合 此場合ニ於テ其後發  
ノ輕キ罪ハ之ヲ罰セス然レトモ若前發ノ罪ヲ處分スルニ  
方リ最長期ノ刑ヲ言渡サ、リシ時ハ充分事實ヲ明ニシテ  
裁判シタル者ト云フヲ得ス若他ニ俱發ノ罪(輕キニセヨ)ア  
リシコトヲ知ラハ或ハ法律ニ許ス範圍内ニ於テ刑期ニ重キ  
ヲ加ヘケルヤ知ル可カラズ然レモ此不都合ハ到底之ヲ避  
シルニ途ナシトス何トナレハ之ヲ避ケントスレハ裁判管  
轄ノ原則ニ背反スルコト爲ルヘケレハナリ故ニ輕罪裁判



所ハ一旦重罪裁判所ノ言渡シタル刑ヲ加重スルヲ得サル  
 一ハ勿論重罪裁判所ト雖モ先ニ言渡サレタル異名ノ刑ヲ  
 加重スルヲ得ス  
 此第一ノ場合ニ於テハ實際新ニ刑ヲ科セサルニ依リ公訴  
 ト裁判ノ必要ナキカ如シト雖モ其實然ラス總テ發覺シタ  
 ル罪ハ之ヲ證明シテ判決ヲ下シ後日無辜ヲ罰スルノ憂ヲ  
 除去スルヲ必要トス加之ナラス輕キ罪ト雖モ未タ裁判セ  
 サル内ハ法律上先ニ言渡サレタル刑ヨリモ輕キ刑ニ處ス  
 ヘキ者ナルヲ斷言スルヲ得サルナリ故ニ本條ニ「其輕キ  
 者ハ之ヲ論セズ」ト云ヒ以テ起訴ト裁判ノ必要ナルヲ示  
 セリ  
 (二) 後發ノ罪前發ノ罪ト等シキ場合 此場合ニ於テ若前發

ノ罪ヲ處分スルニ方リ最長期ノ刑ヲ言渡サ、リシヲ明ナ  
 レハ裁判官ハ後發ノ罪ヲ罰スルノ權限内ニ於テ前刑ヲ補  
 充スルカ或ハ寧ロ新ニ全刑ヲ言渡シ前發ノ刑ヲ以テ後發  
 ノ刑ニ通算スルヲ得サル可カラズ草案ニハ裁判官ニ此  
 權アルヲ記セリト雖モ(草案第百十四條)修正ノ際刪除セ  
 ラレ遂ニ本條ヲ以テ後發ノ罪ヲ問ハサルヲトセリ是甚ダ  
 理論ニ反スル者ト云フヘシ何トナレハ同時ニ公訴ノ起リ  
 タルト否トニ依リ刑ノ輕重ヲ異ニスヘキ理由ナケレハナ  
 リ前示第一ノ場合ト異ナリ前罪判決ヲ經タル時ニハ輕キ  
 ニ非スシテ同等ノ罪未タ發覺セサリシヲ以テ寬ニ失シタ  
 ルノ疑ヒ尙一層多シトス若同等ノ罪ト俱發シタルノ事實  
 ナ知テ判決シタル者ト假定セハ多分最長期又ハ最長期ニ



近キ刑ヲ言渡シタルコトナルヘシ何レニセヨ前ノ場合ニ於テハ裁判管轄ニ關スル原則ニ依リ前發ノ刑ヲ加重スルヲ得スト雖モ本論ノ場合ニ於テハ刑期ヲ算スルモ全ク其原則ニ背反スルノ恐レアラサルナリ

(三)後發ノ罪前發ノ罪ヨリ重キ場合 此場合ニ於テ其後發ノ重キ罪ハ更ニ之ヲ論シ前發ノ刑ヲ以テ後發ノ刑ニ通算ス立法者ハ條文ノ簡ナランコト欲シテ通算ヲ行フニ定役ノ有無ヲ區別セズ又後發ノ刑無期徒刑ト雖モ通算セサルヲ得ス是レ其必要ナキカ如シト雖モ假出獄ヲ得ヘキ期限ヲ定ムル爲メ通算セサル可カラサルコト知ルヘシ(第五十三條)

前發ノ刑罰金科料ニ該リ已ニ納完シタル者ハ(第二十七條)

ノ例ニ照シ折算シテ後發ノ刑期ニ通算ス是亦返還ノ手續ヲ省クノ便宜法ニ過キス但後發ノ刑死刑又ハ無期徒刑ノ如キ通算スルコトヲ得サル場合ニ於テハ罰金科料ノ全額ヲ還附セサル可カラス

本條第二項ハ草案ニ其原文ナシト雖モ畢竟數罪俱發ト再犯ト兩立スル場合ヲ規定シタル者ニ過キス故ニ其文面ニ「前發ノ罪ヲ判決スル時云々」トアルハ裁判確定スル時ト解セサル可カラス若然ラストスレハ條文ハ全ク其意義ヲ成サス第一項ヲ以テ足レリトスヘケレハナリ

故ニ本項ニ所謂判決ハ第一項ニ所謂判決トハ其意義ヲ異ニスル者ト云ハサル可カラス第一項ニ云フ判決ハ獨リ確定裁判ノミヲ指示スル者ニ非スシテ始審終審ノ判



決チモ包含スル者トス若然ラストスレハ裁判未タ確定  
 セサル内ニ餘罪發覺シタル場合ニ於テ其確定スルヲ俟  
 ツノ迂策ヲ取ラサルヲ得ス是豈ニ立法者ノ精神ナラン  
 ヤ本條第一項ハ唯數罪ノ同時ニ併發シタルト前後ニ發  
 シテ別ニ公訴ノ起リタルトニ依テ刑ノ輕重ヲ異ニセサ  
 ルトヲ示スノ主意ニ外ナラサルナリ(因云我刑法ハ草案  
 ニ倣ヒ總テノ裁判ト確定裁判トヲ區別セス一般ニ判決  
 ナル語ヲ用ヒタルハ解釋上ニ頗ル錯雜ヲ來シ且誤解ヲ  
 生スルノ弊ナシトセス他日改正ノ舉アラハ確定裁判ニ  
 ハ特ニ其形容詞ヲ附セラレノト切望スルナリ)  
 本項ノ意義ヲ了解センニハ茲ニ甲乙ノ二罪ヲ犯シタル者  
 アリト假定スヘシ然ルニ甲罪ノニ發覺シテ其刑ヲ言渡サ

レ裁判確定シタル後ニ於テ更ニ丙罪ヲ犯シ其丙罪ノ發覺  
 スルト同時ニ乙罪發覺セリ此場合ニ於テ若丙罪ノ發覺シ  
 タルノ事實ナケレハ本條第一項ヲ適用スヘキノミ然ルニ  
 其事實アリ而シテ丙罪ハ既ニ判決ヲ經タル甲罪ト對照ス  
 レハ再犯ト爲ルヘキ者トス然レハ乙罪ト對照スレハ何レ  
 モ未タ確定裁判ヲ經サル者ナルヲ以テ數罪俱發例ニ依ル  
 ヘキ者ナリ又甲罪ト乙罪トハ固ヨリ數罪俱發例ニ依ルヘ  
 キヲ論テ俟タス畢竟スルニ甲乙丙三罪ノ内ニハ數罪俱發  
 例ニ據ル可キ者ト再犯加重例ニ據ル者アルハ蔽フ可カラ  
 カル事實トス於是乎立法者ハ其既ニ確定裁判ヲ經タル甲  
 罪ハ之ヲ外ニシ唯再犯ノ故ヲ以テ丙罪ノ刑ヲ加重シ(明文  
 ハ無ケレトモ當然ノトナルヘシ)其乙罪ト數罪俱發ノ故ヲ



以テ互ニ其輕重ヲ比較シテ一ノ重キニ從ヒ前發甲罪ノ刑ハ全ク之ニ通算セサルコトニ定メタル者ナリ但此所分法ニ從フ時ハ多少奇ナル結果ヲ生スルコトナキニ非ス細目ニ涉ルヲ以テ之ヲ論セスト雖モ畢竟立法者ハ甲罪ニ對スル丙罪ノ再犯加重例ニ據ルヘキコト乙丙罪ノ數罪俱發例ニ據ルヘキコトヲ認メナカラ甲罪ト乙罪ノ數罪俱發例ニ據ルニ適用シタル吸收主義ヲ貫徹セサルノ批難ヲ免カル、コトヲ得サルナリ

數罪俱ニ發シ一ノ重キニ從フ時ト雖モ其沒收及ヒ徵償ノ處分ハ各本法ニ從フ(第三百三條)此條文ハ別ニ說明ヲ要スルコトナシ沒收ス可キ物件中ニ於テ法律ニ禁制シタル物件ハ

彙ニ說明シタル如ク其占有ノ公安ニ害アルカ爲メ警察處分トシテ之ヲ取上ル者ナルヲ以テ假令ヒ本刑ニシテ第百條及第百二條第一項ノ適用ニ依リ消滅スルトモ沒收ノ妨ケト爲ラサルコト論ヲ俟タス然レトモ其他ノ沒收スヘキ二種ノ物件(第四十三條)ニ付テハ主從ノ關係ニ依リ主刑ノ消滅シタル場合ニ之ヲ沒收スルコトヲ得サルノ疑アルヘキヲ以テ特ニ本條ヲ設ケタル者ナリ徵償處分ハ本來處罰ニ非サルヲ以テ刑ト必スシモ其運命ヲ共ニセサルコトハ明文ヲ要セサルナリ



### 第三章 刑ノ消滅

#### 第一節 總論

純然タル  
刑ノ消滅  
ハ裁判確  
定後ニ生  
ス  
執行ハ刑  
罰消滅ノ

刑ハ裁判確定シタル後ニ非サレハ之ヲ執行スルヲ得ス(第  
五十條)故ニ刑罰消滅ノ理由ヲ説クニハ已ニ裁判ノ確定シ  
タルヲ必要トス未タ裁判ノ確定セサル内ナレハ公訴權  
ヲ消滅セシムルカ又ハ裁判言渡ヲ消滅セシメ刑ハ其自然  
ノ結果トシテ消滅スル者ニ過キス  
刑ハ執行ニ因テ消滅ス執行了テ犯人其刑ヲ免カル、ハ猶

常因

混同

恰モ負債者其負債ヲ返辨シテ義務ヲ免カル、ト同一ナリ  
故ニ執行ハ刑ノ消滅スル當然ノ原因ト云フヲ得ヘシ(執行  
ニ關スル細目ハ治罪法第四百五十九條以下ニ之ヲ定ム)然  
レトモ負債者其負債ヲ辨償セシテ義務ヲ免カル、トア  
ルト同シシ(佛民法第一千二百三十四條)犯人モ亦特定ノ事故  
ニ因リ刑ノ適用ヲ免カル、トアリ本章ニ說明セント欲ス  
ル所ノモノハ即チ其消滅ノ原因ナリトス  
曩ニ說明シタル數罪俱發ノ場合ニ於テ一罪先ニ發シ既ニ  
判決ヲ經テ餘罪後ニ發シ其重キ者ハ更ニ之ヲ論シ前發ノ  
刑ヲ後發ノ刑ニ通算ストアルヲ以テ(第百二條)前發ノ刑ハ  
混同ニ依リ消滅スル者ノ如シ(草案第六十三條)然レトモ法  
文ニハ前發ノ刑ヲ通算ストアリ且數罪俱發ノ原理ヨリ考



再審

ルモ一ノ重キニ從テ處斷スルハ數罪ノ處分法ナルヲ以テ  
 前發ノ輕キ刑ト雖モ消滅スト云フハ穩當ナラサルニ似タ  
 リ況ンヤ其裁判確定後ニ限ラサルナヤ  
 再審ノ場合ニ於テハ刑罰消滅スト云フモ不可ナカルヘキ  
 ナリ  
 新法ヲ以テ刑ヲ廢シ又ハ輕クスルハ刑罰消滅ノ原由ナリ  
 ト云フヲ得ス(第三條)但草案ニ於テハ反對ニ決セリ(草案第  
 六十八條)  
 以下刑ノ消滅スル五個ノ場合ニ付テハ多少説明ヲ要スル  
 點アルヲ以テ節ヲ分テ之ヲ論ゼントス

### 第二節 犯人ノ死去

罰金モ亦  
 犯人ノ死  
 去シタル  
 場合ニ消  
 滅スルヤ

刑ヲ言渡サレタル者死去シタル時ハ其執行ヲ受クヘキ物  
 體ヲ缺クヲ以テ刑ノ消滅スヘキハ當然トス然ルニ我刑法  
 起草者ヲ始メトシ佛國一般ノ學者ハ此原則ノ例外トシテ  
 財産刑ハ犯人裁判確定後ニ死去シタル時之ヲ其死後ニ及  
 ホシ相續人ニ對シテ執行スルヲ得ヘキ者トセリ(草案註釋  
 第三百三十節)其理由ハ蓋シ罰金ノ刑タル宣告ノ一事ヲ以テ  
 民法上ノ債務ニ變シ其言渡ヲ受ケタル者ノ財産ヲ以テ之  
 ヲ辨濟セサル可カラスト云フニ過キス是レ全ク根據ナキ  
 ノ妄言ニシテ其取ルニ足ラサルヲ論ヲ俟タズ財産刑ニ限



リ宣告ニ依テ其性質ヲ變ストハ律ニ明文アレハ已ムヲ得  
 ス現ニ斯ノ如キ明文ナキ以上ハ原理ノ許サ、ル所ナリ假  
 令ヒ死刑又ハ自由刑ト異ナリ犯人死去シタル後ニ於テ實  
 際之ヲ徵收スルニ障礙ナシトスルモ是レ決シテ刑ヲ執行  
 スルモノニ非ス刑ハ其執行ノ物體ト爲ルヘキ者ヲ缺クニ  
 依リ當然消滅シタルモノナリ然ルニ相續人ヨリ徵收スル  
 ヲ得ルモノトセハ刑ハ犯人ノ一身ニ止ルヘキノ原則ヲ  
 顛倒スルニ至ルヘシ幸ニ我立法者ハ此誤説ヲ採用セス罰  
 金科料共ニ之ヲ相續人ヨリ徵收セサルコトニ定メタリ(刑法  
 附則第二十條)

△ 沒收

テ沒收スル者ナルヲ以テ此限ニ非ス

### 第三節 大赦

大赦ノ本

大赦トハ一國主權ノ實行ニ依リ或種類ノ犯罪ニ對シテ其  
 公訴及執行ノ權ヲ拋棄スルヲ云フ(ガロ―氏刑法第三百二  
 十六節參看)此定義ニ依レハ大赦ハ恰モ罪ヲ消滅セシムル  
 ト同一ノ効力ヲ有スルモノトス即チ或一點ニ於テ法律ヲ  
 廢止スルニ外ナラサルヲ以テ立法權ト行政權トノ分立シ  
 テ其所在ヲ異ニスル國ニ在テハ大赦ハ立法者ノ權内ニ在  
 ルモノトシ法律ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ施スコトヲ得ス  
 (佛國現行憲法第三條)然レトモ議院政治ニ避ク可カラサル



大赦ハ一部ノ犯人

弊害トシテ往々反對黨派ノ利刃ト爲リ冗議ニ時日ヲ費ヤシ平和ヲ目的トスル處分ヲシテ却テ社會ニ危險ナル結果ヲ生セシムルヲアリ近來佛國ニ於テ頻々社會黨ノ暴動ヲ見ルハ即チ大赦ノ濫用ニ原因スル所多キ者ト云フモ敢テ誣言ニ非サルナリ於是乎理論上大赦ノ權ハ立法議院ニ屬セサル可カラサルヲ確認スル學者ト雖モ國家ノ公益上ヨリ之ヲ行政權ニ屬セシムルヲ至當トセリ(ガロ―氏第三百二十七節)  
我國ニ於テハ立法行政ノ大權共ニ天皇陛下ニ屬スルヲ以テ大赦ハ勅裁ニ非サレハ得ヘカラサルヲ論チ俟タス(帝國憲法第十六條)  
大赦ハ一個ノ犯人ニ對シテ施スモノニ非スシテ或種類ノ

ニ與ルモノトス

大赦ハ公訴權ト有罪ノ裁判ヲ消滅セシム其効力ノ結果

罪ヲ犯シタル一部ノ犯人ニ與ル恩典トス故ニ大赦ハ時トシテ數多ノ犯罪ト犯罪人ヲ包含スルヲアリ通常ハ政略上ノ處分ニシテ國事犯ニ之ヲ與ルヲ例トス  
大赦ハ恰モ社會カ犯罪ヲ遺忘シタル如ク嘗テ犯罪ノ存シタルヲナキト同一ノ効果ヲ生スル者ナルヲ以テ特赦ノ如ク裁判ノ確定スルヲ俟タス何時ト雖モ之ヲ施スニ妨ナキ者トス又處刑者ノ生前タルヲ要セサルナリ裁判確定スル前ニ在テハ公訴權ヲ消滅セシメ裁判確定後ニ在テハ其裁判ヲ無効トス既ニ公訴權ノ消滅シタル以上ハ大赦ニ因テ免罪ヲ得タル者ハ強テ裁判セラレノヲ要求スルヲ得ス何トナレハ大赦ハ犯人一個ノ利益ヲ主眼トスル者ニ非スシテ國家ノ政略上施行スル所ノ最大恩典ナレハナリ又裁



判ノ消滅スル以上ハ其効力既往ニ遡リ自由刑ハ直ニ之ヲ解キ既ニ徵收シタル罰金科料ハ之ヲ還附シ(千八百七十八年四月二日佛國大赦條例第三條)再ヒ罪ヲ犯ストモ再犯ヲ以テ論スルヲ得ス(第九十七條)右佛國大赦條例第三條大赦ハ公訴權ヲ消滅セシムト雖モ私訴權ハ寸分之ヲ傷クルノ効力ナキ者トス是他ナシ公訴權ハ社會之ヲ有スト雖モ私訴權ハ社會ノ有ニ非サレハナリ又損害賠償ノ責任ハ犯罪ト見タル所爲ニ起因スル者ニ非スシテ一人ノ權利ヲ侵害スルノ所爲ヨリ起ル者ナレハ大赦トハ全ク關係ナキ者タルヲ知ルヘシ

我邦ニ於テ大赦ヲ舉行セラレタルノ實例ハ嘗テ殆ト見サル所ナリ本年二月十一日憲法發布式ト共ニ始メテ汎ク此

大赦ハ私訴權ヲ害セス

恩典ヲ施行セラレタリ

第四節 特赦

特赦ノ定義

特赦トハ天皇ハ大權ヲ以テ有罪ハ確定裁判ヲ受ケタル者ニ其刑ハ執行ヲ免除スルヲ云フ

我國語ニ於テ通常特赦ト言ヘハ刑ノ全部ヲ免除スルヲ云ヒ其一部ヲ免除スルモノハ之ヲ減刑ト稱ス(帝國憲法第十六條)

此定義ヲ以テ特赦ハ大赦ト著ルシク其性質効力ヲ異ニスルヲ知ルヘシ即チ特赦ハ大赦ト異ナリ既往ニ遡テ罪迹及ヒ確定裁判ノ効力ヲ消滅セシムル者ニ非ス唯將來ニ於

特赦ト大赦トノ差別



テ確定裁判ノ執行力ヲ消滅セシムル者ニ過キス故ニ立法  
 行法ノ大權分立スル佛國ノ如キニ於テハ大赦ハ法律ヲ必  
 要トスト雖モ特赦ハ大頭領ノ權内ニ於テ之ヲ與フルヲ  
 得  
 我國ニ於テハ前示ノ理由ニ依リ特赦ト雖モ大赦ト同シク  
 勅裁ニ非サレハ之ヲ得ルヲ得ス(帝國憲法第十六條)  
 又特赦ハ執行權ヲ拋棄スル者ナルヲ以テ裁判確定ノ後ニ  
 非サレハ之ヲ行フヲ得ス裁判ノ未タ確定セサル内ハ上訴  
 スルヲ得ヘキヲ以テ特赦ノ必要ヲ生セス佛國ノ如キニ於  
 テ若裁判確定前ニ特赦ヲ行フヲ得ヘキ者トスレハ大赦  
 ト同シク公訴權ヲ消滅セシムルヲ爲リ大權分立ノ原則  
 ヲ破ルニ至ルヘシ

又同一ノ理由ニ依リ特赦ハ執行ニ因テ始メテ効果ヲ生ス  
 ル刑ニ限り之ヲ適用ス可ク從テ附加刑ニハ適用ス可カラ  
 サル者トス是他ナシ特赦ハ裁判自牖ヲ消滅セシムルノ効  
 力ヲ有スル者ニ非サレハナリ若特赦ヲ以テ附加刑ヲ免ス  
 ルヲ得ルトスレハ一部ハ大赦ト爲ルヘシ立法行法ノ分  
 立セサル國ニ於テハ此區別ヲ明ニスルノ實用ナシト雖モ  
 佛國ノ如キニ於テハ行政首領ノ職權ニ關スル重大ナル問  
 題トス  
 我現行法ニ於テモ主刑ノ執行ニ關係ナキ附加刑ニ對シテ  
 ハ別ニ復權ナル者ヲ設ケ特赦ニ因テ免罪ヲ得タルノミヲ  
 以テ足レリトセス赦狀中記載スルニ非サレハ復權ヲ得ス  
 ト定メタリ(第六十四條)但附加刑中ニ於テ禁治産ノ如キ主



刑執行ノ期限間其効力ヲ有スル者ハ特赦ニ依リ當然消滅スヘシ(第三十五條)

又同一ノ理由ニ依リ特赦ハ毫モ再犯加重ノ妨ケト爲ルヲナク之ヲ受クル者ハ必ス生存者タルヲ要スルナリ  
特赦ハ尙大赦ト全ク異ナリ一、個人、犯人ニ與ル者ナルヲ以テ其特ニ指定シタル人ニ限り之ヲ受ク者トス

特赦ノ實用ハ(一)悛改ヲ獎勵スルト(二)裁判官ノ錯誤ヲ矯正スルト(三)弊害多キ死刑及無期刑ノ執行ヲ成ル可ク避クルトノ三トス故ニ今日何レノ國ノ法律ニモ其設ケナキヲ見サルナリ

特赦ノ申立及其裁可棄却ニ關スル手續ハ治罪法ニ之ヲ定ム(治罪法第四百七十七條以下)

### 第五節 復權

復權トハ  
將來ニ公  
權ヲ有ス  
ルノ能力  
ヲ復スル  
ヲ云フ

復權ハ剝奪セラレタル公權ヲ有スルノ能力ヲ將來ニ回復スルヲ云フ故ニ其文字ニ惑フテ之ヲ汎キニ解ス可カラズ  
將來ニ能力ヲ復スルニ止ル者ナルヲ以テ剝奪以前ニ議員タリ官吏タリシト雖モ復權ヲ得タル後新ニ撰任セラル、ニ非サレハ議員又ハ官吏ト爲ルヲ得ス又勳章年金位記貴號恩給ヲ有セシ者之ヲ剝奪セラレタル場合ニハ更ニ勳功アルニ非サレハ之ヲ有スルヲ得ス  
官吏議員ノ舊職ニ復スルヲ得サルヲ付テハ異説ヲ唱ル者ナシト雖モ勳章年金等ハ復權ニ因リ當然其權利ヲ回復



スル如クニ解スル者ナキニ非ス是全ク復權ナル文字ニ誤  
 マレレテ權利ト權利ヲ有スルハ能力トテ混同シタルモノ  
 ニ外ナラス刑法第六十三條ニ所謂將來ノ公權トハ即チ公  
 權ヲ有スルノ能力ヲ云フモノト解セサル可カラス若一旦  
 剝奪シタル權利ヲ復ストスレハ官吏議員ノ舊職ニ復スル  
 一ヲ得サル可カラス余ハ全ク其間ニ差別ヲ見サルナリ即  
 チ例ヘハ勳章ノ如キハ公權剝奪ノ一事ヲ以テ帳簿ヨリ除  
 名セラレ其權利ハ斷然消滅シタル者ナルヲ以テ之ヲ復ス  
 ルニ由ナク更ニ功勞ニ因テ之ヲ獲得スルノ外ナキナリ  
 然レトモ復權ノ事タル一旦之ヲ與レハ剝奪公權ノ刑ハ斷  
 然消滅シ復タ之ヲ取消ス一ヲ得サルニ因リ決シテ輕卒ニ  
 附與ス可キ者ニ非ス是即チ後ニ説明スル條件ノ設ケアル

復權ト假  
 出獄トノ  
 異同

所以ナリ此取消ス一ヲ得サルノ性質ハ即チ其假出獄ト効  
 力ヲ異ニスル所ニシテ(第五十六條)同シク行狀方正ニ赴ク  
 者ニ與ル恩典ナリト雖モ一ハ既ニ主刑ノ執行ヲ受ケ了リ  
 又ハ特赦ニ由リテ其執行ヲ免セラレタル者ニ之ヲ與ヘ又  
 一ハ未タ主刑執行中ノ者ニ與フル恩典ナルヲ以テ右ノ差  
 別ヲ設ケタル者ト信スルナリ  
 復權ハ大赦ト其効力ヲ異ニスル一恰モ特赦ノ大赦ニ於ケ  
 ルト同一ナリ又其特赦ト相異ナル所ハ主刑ノ執行ヲ免除  
 スルニ非スシテ主刑ノ執行ヲ受ケ了リタル者又ハ特赦ヲ  
 得タル者ニ其刑ノ言渡ニ因テ失ヒタル公權ヲ有スルノ能  
 力ヲ復セシムルニ在リ又再審ト其効果ヲ異ニスル所ハ裁  
 判言渡ヲ消滅セシムルニ非スシテ唯將來ニ裁判言渡ノ効

復權ト大  
 赦ト特赦及  
 再審トノ  
 差異



力ヲ殺シ者ニ過キス

復權ハ裁判ノ効力ヲ殺シ者ナルヲ以テ大赦特赦ト同シク  
勅裁ニ非サレハ得可カラズ(第六十五條)其請願許否ニ關ス  
ル手續ハ治罪法ニ之ヲ定ム(治罪法第四百七十條以下)刑法  
ニハ唯其手續ニ關セサル條件ヲ掲グルノミ

復權ハ剝奪公權ニ  
ノミ適用  
スヘキ者  
トス

復權ハ剝奪公權ニノミ適用ス可キ者ナルヲ第六十三條ヲ  
一目シテ之ヲ知ルヲ得ヘシ彼ノ刑期間其効ヲ生スル禁治  
産及第三十三條ノ停止公權ハ主刑ト其進退ヲ共ニスル者  
ナルヲ以テ復權ノ適用ヲ生スルヲナシト雖モ監視ハ之ト  
異ナリ短期ノ刑ナレハトテ其行狀方正ニ赴ク者ノ爲ニ之  
ヲ解イテ可ナルヲハ剝奪公權ト相異ナルヲナキカ如シ唯  
剝奪公權ノ場合ヨリモ多少峻改ノ實否ヲ觀察スルノ年限

復權ノ必  
要

ヲ短クス可キノミ故ニ草案(第七十五條)及佛國治罪法(第六  
百二十條)ニハ(rehabilitation)復權トハ即チ其譯語ナリノ適用ヲ  
汎クシ主刑ノ終リタル後ニ其効ヲ生スル一般ノ附加刑ニ  
之ヲ及セリ然ルニ其草案ノ條文中ニ於テ獨リ剝奪公權ニ  
關スル部分ノミヲ採用セラレタル所以ハ畢竟監視ハ行政  
處分ヲ以テ假ニ之ヲ免スルヲ得ルノ方法アルニ因リ(第  
四十一條)別ニ復權ノ適用ヲ擴ムルノ必要ナシト認メラレ  
タルニ由ルモノナルヘシ  
復權ヲ得ルニ必要ナル第一ノ條件ハ主刑ノ終リタルヲナ  
リ(第六十三條)其然ル所以ハ剝奪公權ノ刑タル主刑ノ終リ  
タル後ニ其効ヲ生スル者ナルニ依リ復權ヲ與フルノ適否  
ハ自ラ其日ヲ經過シタル後ニ非サレハ之ヲ知ルヲ能ハサ



ルナリ本條ニ主刑ノ終リタル日ヨリトアレトモ唯其執行  
ヲ受ケ了リタル場合ノミチ云フニ非スシテ特赦ヲ得タル  
場合ヲモ包含スルモノトス(草案第七十五條佛國治罪法第  
六百十九條以下)死刑ト無期刑ニ付テハ執行ヲ終ルノ日ナ  
キヲ以テ特赦又ハ期滿免除ヲ得タル場合ニ非サレハ復權  
ノ適用ヲ生セサルヘシ

五年ノ經  
過ヲ要ス  
ルハ何ゾ  
ヤ

公權ヲ復スルニ五年ノ經過ヲ要スル所以ハ他ニ非ス剝奪  
公權ハ主刑ノ執行ヲ終ヘタル後ニ其効ヲ生スル者ナルニ  
依リ之ヲ復セシメテ果シテ危險ナキヲ知ルニハ必スヤ  
自由ヲ得タル後若干年間ノ行狀ヲ觀察セサル可カラズ其  
行狀方正ニ赴カサル者ハ假令ヒ五年十年ヲ經過スルトモ  
復權ヲ得ルヲ能ハス是即チ本條ニ「情狀ニ因リ云々」トアル

所以ナリ通常ハ復權願書ニ添付スル書類ヲ參考トシテ其  
許否ヲ決スルヲ得ヘシ(治罪法第四百七十一條)佛國治罪法  
ニ於テハ若干ノ年間同一ノ郡區内ニ居住スルヲ條件トシ  
以テ容易ニ復權ヲ得可カラサルヲトセリ(同國治罪法第六  
百二十一條)

期滿免除ハ法律ニ叛キ刑ノ執行ヲ免カル、者ナルヲ以テ  
佛國法ニ於テハ復權ニ導クノ効力ヲ與ヘス然レモ我刑法  
ニ於テハ主刑ノ期滿免除ヲ得タル者ハ監視ニ付シタル日  
ヨリ五年ヲ經過スルノ後公權ヲ復スルヲ得ト定メタリ  
(第六十三條第二項)



第六節 期滿免除

刑事期滿  
免除ノ定  
義及種別

刑事期滿免除トハ一定ノ期限ヲ經過スルニ因リ公訴若クハ執行權ハ消滅スルヲ云フ其公訴權ヲ消滅セシムル者ハ之ヲ稱シテ公訴ノ期滿免除ト云ヒ其執行權ヲ消滅セシムル者ハ之ヲ名ケテ刑ノ期滿免除ト云フ故ニ公訴ノ期滿免除ハ大赦ニ類似シ刑ノ期滿免除ハ特赦ト殆ト其効力ヲ同フス唯其大赦又ハ特赦ト相異ナル點ハ勅裁ト稱スル國權執行ノ行爲ヲ要スルコトヲ犯罪又ハ裁判確定ノ日ヨリ若干ノ年月ヲ經過シタルノミヲ以テ其効ヲ生スルモノトス

刑事期滿  
免除ノ基  
礎

此法律ヲ設ケタル所以ハ畢竟歲月ノ久シキヲ經ルニ從ヒ世人ハ漸クニ犯罪事件ヲ遺忘シ遂ニ之ヲ罰スルノ必要ナク却テ公益ニ反スルカ故ナリ蓋シ刑罰ハ社會ノ秩序安寧ヲ維持スルノ必要已ムヲ得サルニ其基本ト限界ヲ汲ムヲ以テ其必要ナキニ至ラハ公訴及ヒ執行權ノ消滅スルハ當然ノコト云フヘシオルトラン氏ガロー氏ノ如キ夫ノ正理ト實益トヲ以テ社會刑罰權ノ基礎ト説ク學者ハ其第二ノ基礎タル實益ヲ缺クテ以テ期滿免除ノ根基ト爲セリ佛國治罪法編纂錄ヲ見ルニ其編纂ノ事業ニ與リタルレアル氏及ルーウエ氏ノ如キハ久シキ年間犯人ノ心中安キ日ナク常ニ前非ヲ悔ヒ縛ニ就クヲ苦慮シタルヲ以テ既ニ其社會ニ對スル責任ヲ洗滌シタル者ナリト曰ヘリ然レトモ

洗滌說ヲ  
駁ス



是唯想像上ノ斷言ニ止リ以テ期滿免除ノ基本ト爲スニ足  
ラス何トナレハ心中ノ悶苦ハ人ニ依テ其有無ト多寡ヲ異  
ニス且廉恥ヲ破ラサル輕キ罪ヲ犯シタル場合ニ生スル者  
ニ非サレハナリ

証據湮滅  
説ヲ駁ス

又或學者ハ証據ハ湮滅ヲ以テ期滿免除ノ基本トセリ此説  
ハ公訴ノ期滿免除ヲ説クニ方テハ一理ナキニ非スト雖モ  
書跡ノ儼然遺存スル刑ノ言渡ニ對スル期滿免除ノ本源ヲ  
説明スルニ足ラス故ニ其中ノ或學者ハ此理由ヲ以テ唯公  
訴ノ期滿免除ノ基礎トスルニ止メ刑ノ期滿免除ハ前示刑  
ヲ執行スルノ必要ナキニ基クモノトセリ是説ハ我刑法起  
草者ボアソナード氏ノ説ナリ(草案註釋第三百三十二節及第  
百三十三節)然レトモ公訴ノ期滿免除ニ付テモ余ハ全ク此

説ニ同意スル能ハス何トナレハ顯然タル反證ノ存スル場  
合ニ適用ス可カラサレハナリ殊ニ犯罪事實ヲ自白シタル  
場合ニハ公訴權ノ消滅スル理由アル可カラス加之ナラス  
自白スル者ハ假令ヒ期滿免除ノ期限ヲ經過シタルヲ証  
明シテ其權利ヲ張ラントスルモ期滿免除ヲ得ルヲ能ハサ  
ルヘシ即チ民事期滿免除ト其効力ヲ異ニセス公益ニ基ク  
刑事期滿免除ノ本旨ニ反スルヲ爲ルヘシ之ニ加ルニ証  
據ノ湮滅ハ短期ノ期滿免除ノ基本ト爲ルニ足ラサルヲ以  
テ右説ノ全ク取ルニ足ラサルヲ知ルヘキナリ若干ノ時  
日ヲ經過スルニ因テ証據ヲ聚集スルニ難キヲ加ルハ唯  
期滿免除ノ期限ヲ定ムルニ付テ或ハ參考ト爲ル可キノミ  
トス



期滿免除  
ヲ非トス  
ル説

ベンザム、セルウアン、サガリ、カラーノ諸學者ハ期滿免除  
ヲ以テ犯罪必然ノ結果タル刑罰ノ性質ニ悖リ且不問テ希  
望シテ罪ヲ犯スノ念ヲ起生セシムルノ危害アリトシ全ク  
正當ノ根基ヲ欲ク者ト斷言セリ是固ヨリ極端ニ渉ルノ説  
タルヲ免カレスト雖モ理論上ニ於テハ前二説ニ優出スル  
者ト云ハサルヲ得ス

期滿免除  
ノ理由曰  
リ生スル  
結果

刑事期滿免除ノ基礎ハ余已ニ之ヲ示セリ今其最モ著ルシ  
キ結果ヲ舉クレハ(一)犯罪又ハ刑ノ輕重ニ依テ期滿免除ノ  
期限ヲ異ニスルヲナリ是レ他ナシ犯罪事件ノ記念ハ罪ノ  
重キニ從ヒ永續スル者ナレハ之ヲ罰スルノ必要モ亦永久  
ニ存セサル可カラサレハナリ(二)刑ノ期滿免除ハ公訴ノ期  
滿免除ヨリモ其期限ノ永キヲナリ是畢竟裁判上証明セラ

刑事期滿  
免除ト民  
事期滿効  
トノ差異

レタル罪ハ其痕迹ヲ留ムルヲ自ラ永キヲ以テナリ(刑法第  
五十九條治罪法第十一條)此二點ハ何レノ國ノ法律ニモ其  
規定ヲ見サルハナシ又以テ前示基礎ノ確然トシテ動ス可  
カラサルヲ証スルニ足ルヘキナリ  
刑事期滿免除ハ民事期滿得免ト異ナリ專ラ公益上ノ理由  
ニ基ク者ナルヲ以テ犯人ノ心情如何ヲ問ハス期限經過ノ  
一事ヲ以テ當然其効ヲ生スル者トス故ニ(一)犯罪又ハ處刑  
ノ事實ヲ自認スルモ期滿免除ノ効力ヲ害セス(民事期滿効  
ニ付テハ議論ナキニ非スト雖モ余ハ反對ニ決スルヲ至當  
ナリト信ス(二)既得ノ期滿免除ト雖モ其權利ヲ抛テ裁判又  
ハ刑ノ執行ヲ受ケンヲ要求スルヲ許サス是亦民事期滿  
効ト相異ナル一點ナリ(佛民法第二千二百十條)(三)既得ノ



刑ノ期滿  
免除

期滿免除ハ判官ノ職權ヲ以テ之ヲ補充セサル可カラス之  
 ニ反シ民事期滿効ハ被告ニ於テ之ヲ抗辨スルヲ必要トシ  
 判官ノ職權ヲ以テ之ヲ宣告スルヲ許サス(佛民法第二十二  
 百二十三條)(四)刑事期滿免除ハ大審院又ハ大審院ヨリ被告  
 事件ヲ送附セラレタル裁判所ニ於テモ之ヲ抗辨スルヲ得  
 ヘシト雖モ民事期滿効ハ始メテ大審院ニ於テ之ヲ抗辨ス  
 ルヲ得ス(佛民法第二千二百二十四條及千八百六十三年八  
 月三日同國大審院ノ判決)  
 公訴ノ期滿免除ハ治罪法ノ範圍ニ屬スルヲ以テ之ヲ省キ  
 專ラ刑ノ期滿免除ニ關スル要領ヲ論セントス  
 刑ノ期滿免除ハ若干ノ年間其執行ナキニ因リ執行權ヲ消  
 滅セシムル者トス故ニ執行ヲ要スル刑ニ對シテハ其効ヲ

期滿免除  
ニ由テ消  
滅スル刑  
ハ何々ナ  
ルヤ

剝奪公權  
停止公權  
及監視ハ

生スト雖モ執行ノ所爲ヲ要セス裁判確定ノ一事ヲ以テ其  
 効ヲ生スル刑ニハ適用ナキ者トス  
 此原則ニ從ヒ生命刑自由刑及財産刑ハ期滿免除ニ因テ消  
 滅スヘシ但沒收ニ付テハ殊ニ注意ヲ要スル點ニアリ(一)沒  
 收ハ五年ヲ經テ期滿免除ヲ得(第六十條第三項)其理由ハ蓋  
 シ沒收ハ輕微ナル刑ト云フニ在ルヘシト雖モ違警罪ノ場  
 合ニ於テ主刑ハ一年ヲ經テ期滿免除ヲ得ルニ其附加刑タ  
 ル沒收ハ五年ノ久シキニ涉ルノ奇果ヲ生スルヲアリ(二)禁  
 制物ハ期滿免除ノ限ニ非ス是畢竟警察處分トシテ沒收ス  
 ル者ナレハナリ(第六十條末項)  
 之ニ反シ剝奪公權停止公權及ヒ監視ハ期滿免除ヲ得ス(第  
 六十條第一項)其理由ハ剝奪公權又ハ停止公權ハ外形上ノ



何故二期  
満免除ヲ  
得サルヤ

執行ヲ要セス從テ逃亡シテ執行ヲ逃レタリト云フヲ得ス  
假令ヒ逃亡中ニ公權ヲ實行スルコトアルモ是唯身分占有ノ  
一事實ニ止リ期滿免除ニ導クニ足ラスト云フニ在リ(草案  
註釋第三百三十五節)

然レトモ理論上ヨリ言ヘハ剝奪セラレタル公權ヲ實行ス  
ルハ執行ヲ免カル、ノ状態ニ外ナラズ積極的ノ執行ヲ要  
スル場合ニハ消極的ニ之ヲ逃レ消極的ニ執行スル場合ニ  
ハ積極ノ所爲ヲ以テ之ヲ逃ル、ハ當然ノコトニシテ唯執行  
ト其之ヲ逃ル、ノ方法ヲ異ニスル者ニ過キス然レトモ又  
一方ヨリ考ルニ積極的ニ執行ヲ逃ル、場合ニハ世上人心  
ニ犯罪事件ノ記念ヲ惹起シ從テ其記念ノ永存スルコト逃亡  
シテ無爲ニ年月ヲ經過スル場合ノ比ニ非ス然ルニ其身分

占有ノ事實ヲ疊ヌルノミチ以テ期滿免除ヲ得ル者トセハ  
或ハ遺忘ノ未タ全クカラサルニ期滿免除ヲ得ルノ弊ナシ  
トセス余惟フニ右附加刑ノ期滿免除ヲ得サルハ此理由ニ  
基クモノトスレハ全ク不當ニハ非サルヘシ夫レニシテハ  
此理由ハ唯期滿免除ノ期限ヲ定ムルニ關スルコトニシテ斷  
然之ヲ得ル能ハサルノ理由ト爲スニ足ラサルナリ  
監視モ亦逃走其他姓名住居ヲ變スル等ニ依リ實際其執行  
ヲ逃ル、コトヲ得サル者ニ非ス故ニ草案ニハ一定ノ期限ヲ  
經テ期滿免除ヲ得ルコトニ定メタリ(草案第七十一條)  
右期滿免除ヲ得サル附加刑中ニ禁治産ヲ記載セサル所以  
ハ主刑ノ其期內其効力ヲ生スル者ナルニ依リ期滿免除ノ  
點ニ於テモ主刑ト其進退ヲ共コスルニ在リ又停止公權ヲ



期滿免除  
ノ期限

揭クト雖モ第三十三條ノ場合ニハ主刑ト共ニ期滿免除ヲ  
得ルコト疑フ可キニ非ス  
期滿免除ノ期限ハ第五十九條ニ之ヲ定ム即チ死刑ハ三十  
年無期徒流刑ハ二十五年有期徒流刑ハ二十年重懲役重禁  
獄ハ十五年輕懲役輕禁獄ハ十年禁錮罰金ハ七年拘留科料  
ハ一年トス

本條ハ細ニ各刑ノ輕重ヲ比例トシテ期滿免除ノ期限ヲ定  
メタル者ニシテ佛國法ノ如ク重罪輕罪及違警罪ノ刑ニ基  
キ其期限ヲ三分シタル者トハ大ニ相異ナリ(佛國治罪法第  
六百三十五條白耳義刑法第九十二條)是レ草案(第七十條)ヲ  
採用シタル者ニシテ草案ハ又獨逸刑法(第七十條)及伊太利  
刑法草案(第六六條)ヲ模範ニ取リタル者トス期滿免除ノ基

本ニ遡テ其當否ヲ判斷セズ素ヨリ當チ得タル者ト云ハサ  
ルヲ得ス其然ル所以ハ他ナシ重罪輕罪又ハ違警罪ノ刑ヲ  
見ルニ一トシテ其輕重ヲ異ニセサル者ナシ果シテ然ラハ  
其輕重ニ比例シテ記念ノ消滅スルニモ遲速ノ差異ナキ能  
ハス從テ執行權ヲ放擲シテ害ナキニ至ルハ各刑ニ因テ自  
ラ其時日ノ緩急ヲ異ニスル者ト云フヘキナリ  
期滿免除ノ期限ハ本刑ニ因テ之ヲ定ムルニ非スシテ宥恕  
又ハ酌量減輕シタル後實際ニ言渡シタル刑ニ因テ定ム可  
キ者ト信ス是レオルトラン氏及ガロイ氏ノ說ナリ(オルト  
ラン氏刑法千八百九十六節ガロイ氏四百二十三節)其理由  
ハ他ニ非ス期滿免除ニ因テ消滅スル所ノモノハ執行權ナ  
リ而シテ其執行スルヲ得ヘキ刑ハ實際ニ言渡シタル刑ニ



非スヤ我刑法ニ刑ノ執行ヲ遁レタル者云々トアルヲ見テ  
モ(第五十八條)其言渡シタル刑ヲ標準トスヘキヲ知ルヘ  
シ然レトモ佛國判決例并ニ過半ノ刑法學者ハ反對說ヲ採  
用セリ(フ、エリ)氏刑事事實例第一卷千七十七節ウイレー氏  
刑法第五百十四頁ヘルトール氏同第六百二十二頁其他略  
之

期滿免除ノ期限ニ次テ定メサル可カラサル者ハ其起算點  
トス起算點ハ裁判ノ種類ニ依テ異ナリ對審裁判ハ其確定  
シタル後刑ハ執行ヲ遁レタル日ヨリ起算ス(第六十一條)是  
畢竟其日ヲ始メトシテ世人ハ漸クニ刑ノ言渡アリタル  
ヲ遺忘シ從テ之ヲ執行スルヲ要セサル所以ノ端緒ヲ啓ク  
モノナレハナリ

起算點  
對審裁判  
ノ場合

捕ニ就キ  
再ヒ逃走  
シタル場  
合

刑ノ執行ヲ遁レタル者若シ捕ニ就キ再ヒ逃走シタル時ハ  
其再逃走ノ日ヨリ起算ス(同條)是他ナシ世人ハ未タ全ク刑  
ノ言渡アリタルヲ遺忘セサル内ニ捕縛ニ依リ其記念ヲ  
復セシメタルヲ以テ期滿免除ヲ得ルニハ又新ニ執行ヲ遁  
レテ漸次ニ記念ヲ消滅セシメサル可カラス是即チ後ニ既  
ク如ク捕縛ヲ以テ期滿免除中斷ノ原由トシ前逃走中ニ經  
過シタル期限ヲ除算シテ新ニ再逃走ノ日ヨリ起算スル所  
以ナリ  
刑ノ執行ヲ遁レタル日ヨリ起算スルノ原則ニハ制限ナキ  
ヲ以テ自由刑一部ノ執行ヲ受ケタル者逃走シタル時期滿  
免除ニ依リ其殘ル部分ノ執行ヲ免カル、ニハ逃走ノ日ヲ  
以テ起算點トセサル可カラス是レ原則ノ適用ナリトハ雖



モ實際不權衡ナル結果ヲ生スルコトナシトセズ即チ例ハ  
徒刑ニ處セラレ二十年若シハ二十五年間(第五十九條)其執  
行ヲ遁レタル者ハ殆ト執行ヲ受ケ了リテ逃去シタル者ヨ  
リモ期滿免除ノ點ニ於テ却テ利益ナル地位ヲ有スルコト  
爲ルヘキナリ

死刑及罰  
金ハ何レ  
ノ日ヨリ  
期滿免除  
ノ期限ヲ  
起算スル  
ヤ

關席裁判  
ノ場合

執行ヲ遁レタル日トハ通常裁判確定ノ日ヲ云フト雖モ死  
刑ハ裁判確定シテ司法大臣ヨリ命令ノ下リタル後ニ非サ  
レハ之ヲ執行スル能ハサルニ因リ其命令ノ下リタル日ヲ  
以テ起算點トセサル可カラズ(第十三條)又罰金科料ハ法律  
ニ定ムル完納期限ヲ經過シタル日ヨリ起算ス可キ者トス  
(第二十七條及第三十條)  
關席裁判ハ之ニ反シテ其宣告ハ日ヨリ期滿免除ノ期限ヲ

起算ス(第六十一條末文)其然ル所以ハ蓋シ此裁判タル期滿  
免除ヲ得サル間ハ何時ト雖モ上訴ヲ以テ攻撃スルヲ得ヘ  
キ者ナルニ依リ(治罪法第三百五十六條第三百六十六條第  
四百六十七條)常ニ未確定ノ裁判ナリ即チ執行力ヲ具ヘサ  
ル者ナリ故ニ從テ執行ヲ遁レタリト云フ可キ場合ヲ生セ  
ズ左レハトテ無際限ニ上訴ノ途ヲ開キ裁判ノ確定スルヲ  
妨シルヲ得ス故ニ治罪法ニハ刑ノ期滿免除ノ了ルヲ期限  
トシテ上訴ノ權ヲ消滅セシメ以テ其裁判ヲ確定セシメタ  
リ然ルニ其目的ヲ達スルニハ到底裁判宣告ノ日ヲ以テ期  
滿免除ノ起算點ト定ムルノ外ナキナリ然レトモ此法律ニ  
從ヘハ未ダ確定セサル刑ヲシテ期滿免除ニ至ラシムルヲ  
以テ公訴ノ期滿免除ト刑ノ期滿免除ト混同スルノ觀ヲ呈



シ且實際奇怪ナル結果ヲ生スルコトアリ(細目ニ涉ルヲ以テ之ヲ略ス)於是乎其當否ニ付テハ多少議論ナキコト非ス然レトモ右ニ述ル如ク立法者ノ定メタル所モ亦其理由アリ(佛國治罪法ニ規定スル所ト相異ナラサルナリ)同治罪法第四百七十六條及第六百三十五條

是ヨリ期滿免除ノ中斷ノコトヲ一言スヘシ

夫レ刑ノ期滿免除ニ因テ消滅スル所以ハ畢竟法律ニ定ムル年間其執行ヲ遁レテ自由ヲ占有セシニ因ルモノナリ故ニ期滿免除ノ經過ヲ妨止スルニハ社會ハ己レニ其占有ヲ復スルコトヲ必要トス辭ヲ換ヘテ言ヘハ期滿免除ハ必ス執行ニ因テ中斷セラレサルヲ得ス又執行ニ非サレハ之ヲ中斷スルノ効力アル可カラズ是レ公訴ノ期滿免除ト其中斷

中斷ノ原由

ノ原由ヲ異ニスル所ニシテ公訟ノ期滿免除ハ凡テ起訴豫審又ハ公判ノ手續アリタルニ因テ其期限ノ經過ヲ中斷スル者トス(治罪法第十四條)

我刑法ハ此原則ニ反シ純然タル執行ノ外ニ期滿免除中斷ノ原由ヲ設ケタリ左ニ自由刑ト死刑ト財産刑トヲ區別シ以テ其各々ニ關スル期滿免除中斷ノコトヲ畧述スヘシ

自由刑

(一)自由刑ハ捕縛ヲ外ニシテ執行ト認ム可キ所爲ナシ然ルニ我刑法ハ逮捕ヲ命スル最終ノ令狀ヲ發シタルヲ以テ期滿免除ノ經過ヲ中斷スルノ効力アル者トセリ(第六十二條)或學者ハ此法律ヲ以テ當テ得タル者トシ其理由トシテ令狀ヲ發スルハ即チ社會犯罪ヲ遺忘セサルノ確証ナリト曰フト雖モ價值ナキ説ト云ハサルヲ得ス其然ル所以ハ期滿



免除ノ經過ヲ妨クルニハ官ニ於テ犯罪ヲ遺忘セサルヲ表彰シタルヲ以テ足レリトセズ實際執行ノ所爲ヲ行ハサル内ハ執行ヲ逶レタル者ト謂ハサルヲ得サルナリ草案ニハ捕縛ヲ以テ期滿免除ヲ中斷スル單一ノ原由トセリ(草案第七十三條白耳義刑法第九十六條佛國治罪法ニハ明文ナシト雖モ前示ノ原則ニ基キ同一ノ判決ヲ下サ、ルヲ得スガロ一氏第四百二十五節參看)我現行刑法ニハ令狀ヲ以テ足レリトシタルハ獨逸刑法ニ倣ヒタル者ト考フ(同國刑法第七十二條)伊太利刑法草案ニ於テモ同シク執行準備ノ所爲ヲ以テ足レリトシ尙其外ニ同種ハ重罪又ハ輕罪ヲ犯シタルヲ以テ期滿免除中斷ノ原由ト認メタリ(同草案第九條)

捕縛ハ關  
席裁判ノ  
場合ニ於  
テモ期滿  
免除ヲ中  
斷スルヤ

關席裁判ニ依リ刑ヲ言渡サレタル者捕ニ就キタルノ一事ヲ以テ期滿免除ノ經過ヲ中斷スル者ト云フヲ得ス其然ル所以ハ關席裁判ハ期滿免除ニ至ルマテ確定セサル裁判ナルヲ以テ縛ニ就キタレハトテ直ニ刑ヲ執行スルヲ得ス捕縛ノ目的ハ刑ヲ執行スルニ非スシテ唯故障期限ノ起算點ト爲リ(治罪法第四百七條對審辨論ヲ開ク準備ノ所分ニ過キス故ニ其對審裁判ヲ受クル前ニ於テ再ヒ逃走シタル時ハ期滿免除ハ原裁判ノ日ヨリ嘗テ中斷セラレタルヲナキモノト看做ス是レ疑ナキ原則適用ノ結果ナリト雖モ飲席裁判ニ依テ刑ヲ言渡サレタル者ハ對審裁判ニ依テ刑ヲ言渡サレタル者ヨリモ期滿免除ノ點ニ於テ却テ好地位ヲ有スルノ觀アルヲ免カレス



死刑

然レトモ縛ニ就キタル者治罪法ニ定ムル故障期限内ニ故障ヲ爲サスシテ逃走シタル時ハ其期限ヲ經過シタルニ因テ裁判確定ス(治罪法第三百三十二條第三百五十五條第四百七條)裁判確定スル上ハ直ニ執行スルヲ得可キニ由リ其日ヨリ期滿免除ノ期限ヲ起算ス可キモノトス

(二)死刑ノ期滿免除ヲ中斷スルニハ捕縛又ハ執行ノ命令ヲ下シタルヲ以テ足レリトセス三十年間其執行ナケレハ獄中ニ在ルト獄外ニ在ルトヲ問ハス當然期滿免除ヲ得タルモノト謂ハサル可カラス然リト雖モ我刑法第六十一條及第六十二條ニハ汎シ刑ノ執行ヲ選レタル者云々ト曰ヒ自由刑ト死刑トヲ區別セテ捕ニ就キタルノ事實ト最終ノ令狀ヲ出シタルノ事實トヲ以テ期滿免除ノ經過ヲ中斷スル

財産刑

ノ効力アル者ノ如クニ記セリ之ニ反シテ草案ニハ前ニ言ヘル如ク現行第六十二條ノ如キ條文ナク又捕縛ヲ以テ中斷ノ理由トスルヲモ明ニ之ヲ自由刑ト監視ノニニ限レリ(草案第七十三條一項)然ルニ審査修正ノ際ニ於テ此點ヲ變更セラレタルヲ以テ見レハ其精神ノ所在ハ之ヲ知ルニ由ナシト雖モ現行法ノ解釋トシテハ死刑ト自由刑ハ其期滿免除中斷ノ理由ヲ異ニセサル者ト説ク方其當ヲ得タルカ如シ

(三)財産刑ハ辨濟又ハ差押即チ執行ノ所爲ニ非サレハ期滿免除ノ經過ヲ止ムルトナシ故ニ其辨濟又ハ差押ニ因リ罰金ノ全額ヲ完納スル能ハサル場合ニ於テハ新ニ其時ヨリ殘額ニ對スル期滿免除ノ期限ヲ起算ス可キ者トス我現行



刑法ニハ罰金ニ關スル期滿免除中斷ノ原由ヲ明記セスト  
 雖モ右執行ノ所爲ハ當然之ヲ認ムルモノト解シテ不可ナ  
 カルヘシ草案ハ民法ニ倣ヒ自認ニマテ中斷ノ効力ヲ與ヘ  
 タリト雖モ草案第七十三條二項佛民法第二千二百四十八  
 條其當否ニ至テハ大ニ疑ナキ能ハス何トナレハ刑事期滿  
 免除ハ公益ニ基キ民事期滿免除ト深ク其性質ヲ異ニスル  
 者ナレハナリ

立法者ハ公訴ノ期滿免除ニ於ケルト同シク一トシテ刑ノ  
 期滿免除ヲ停止スルノ原由ヲ認メス是レ亦民事期滿免除  
 ト相異ナル一點ナリ(佛民法第二千二百五十一條以下)故ニ  
 刑ヲ執行セサル原因ノ如何ヲ問ハズ期滿免除ハ法律ニ定  
 ムル日ヨリ起算シテ其経過ヲ停止セラレサルモノト知ル

期滿免除  
ニ停止ナ

期滿免除  
ト特赦ト  
ノ差異

ヘシ(停止ト中斷ノ差異ハ中斷ハ執行ヲ表シタルニ因リ停  
 止ハ執行スル能ハサル情狀ノ存スルニ因ルト中斷ハ再ヒ  
 期限ヲ算スル場合ニ於テ前ニ經過シタル期限ヲ算入セス  
 停止ノ場合ハ之ヲ算入スルノ二點ヲ以テ其重要ナル者ト  
 ス)

期滿免除ノ効用ハ特赦ト同シク刑ノ執行ヲ解クニ在リト  
 雖モ唯特赦ニ及ハサル一點ハ特赦ハ國君ノ恩典ナルヲ以  
 テ赦狀特ニ記載シテ復權ヲ得セシムルヲアリト雖モ第六  
 十四條(主刑ノ期滿免除ヲ得タル者ハ監視ニ付シタル日ヨ  
 リ五年ヲ經過スルノ後ニ非サレハ復權ヲ得ルヲ能ハサル  
 ナリ)第六十三條

刑法論綱畢

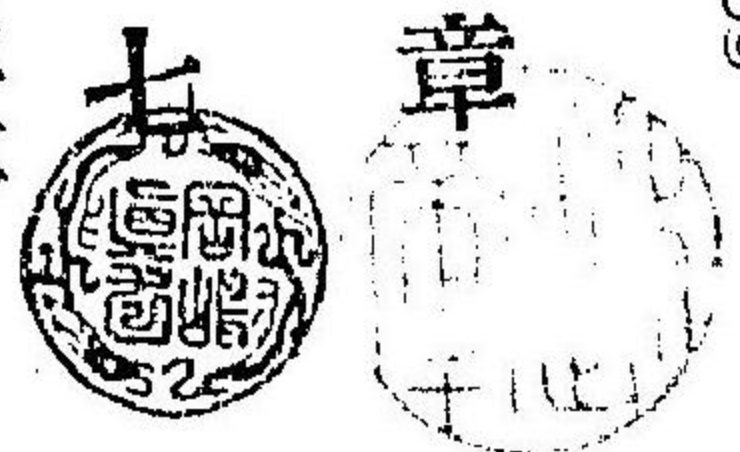


明治二十二年七月六日印刷  
同 年七月十日出版

定價一圓四十錢

著者

東京市麹町區富士見町六丁目七番地  
富井政章



印刷者兼  
發行所

發行所

東京市日本橋區通三丁目八番地寄留  
岡島寶文館

同

東京市東區本町四丁目百五十四番屋敷  
岡島寶玉堂

同

東京市東區備後町四丁目十九番屋敷  
岡島支店

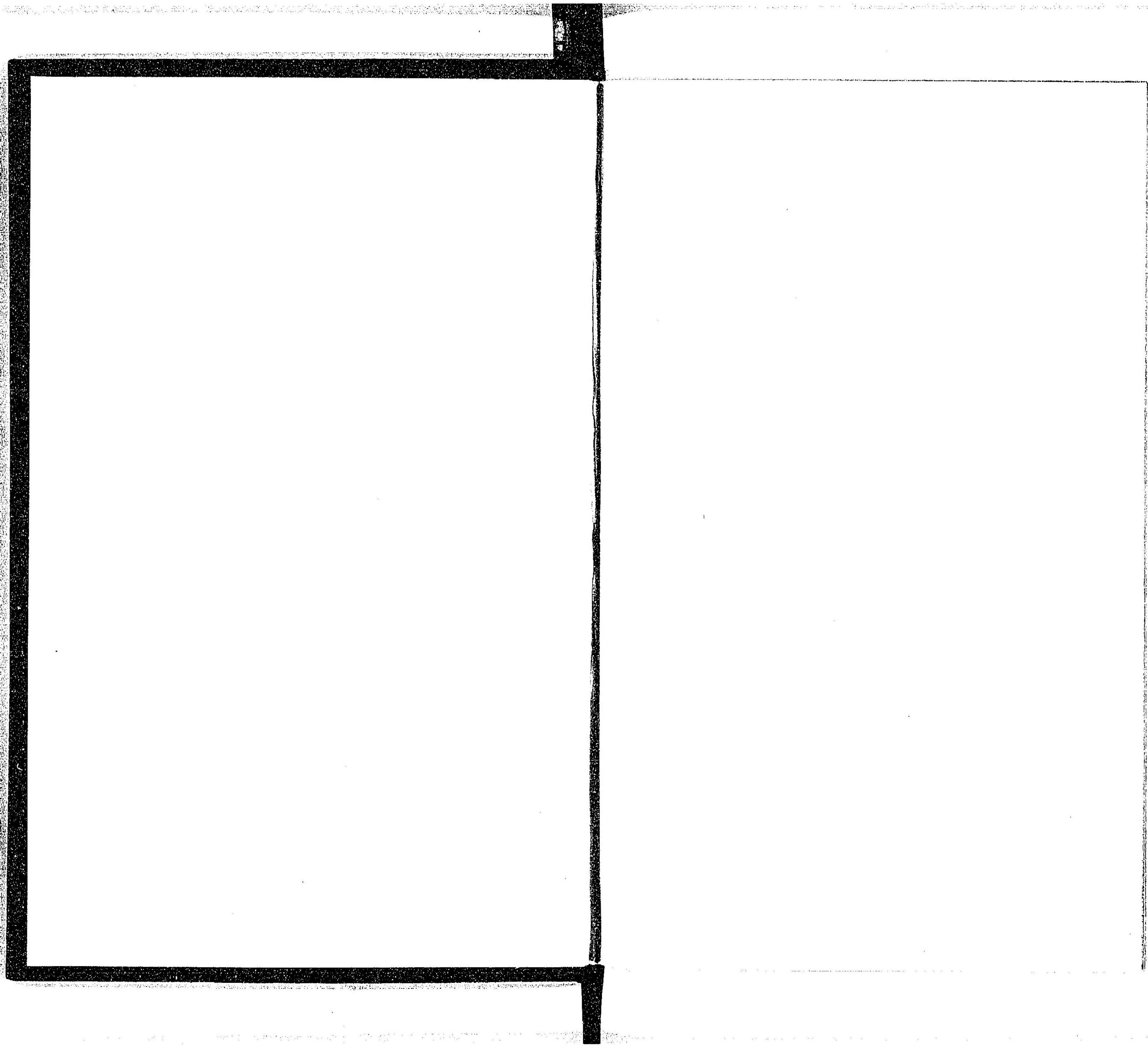
同

東京市日本橋區通三丁目八番地  
岡島支店

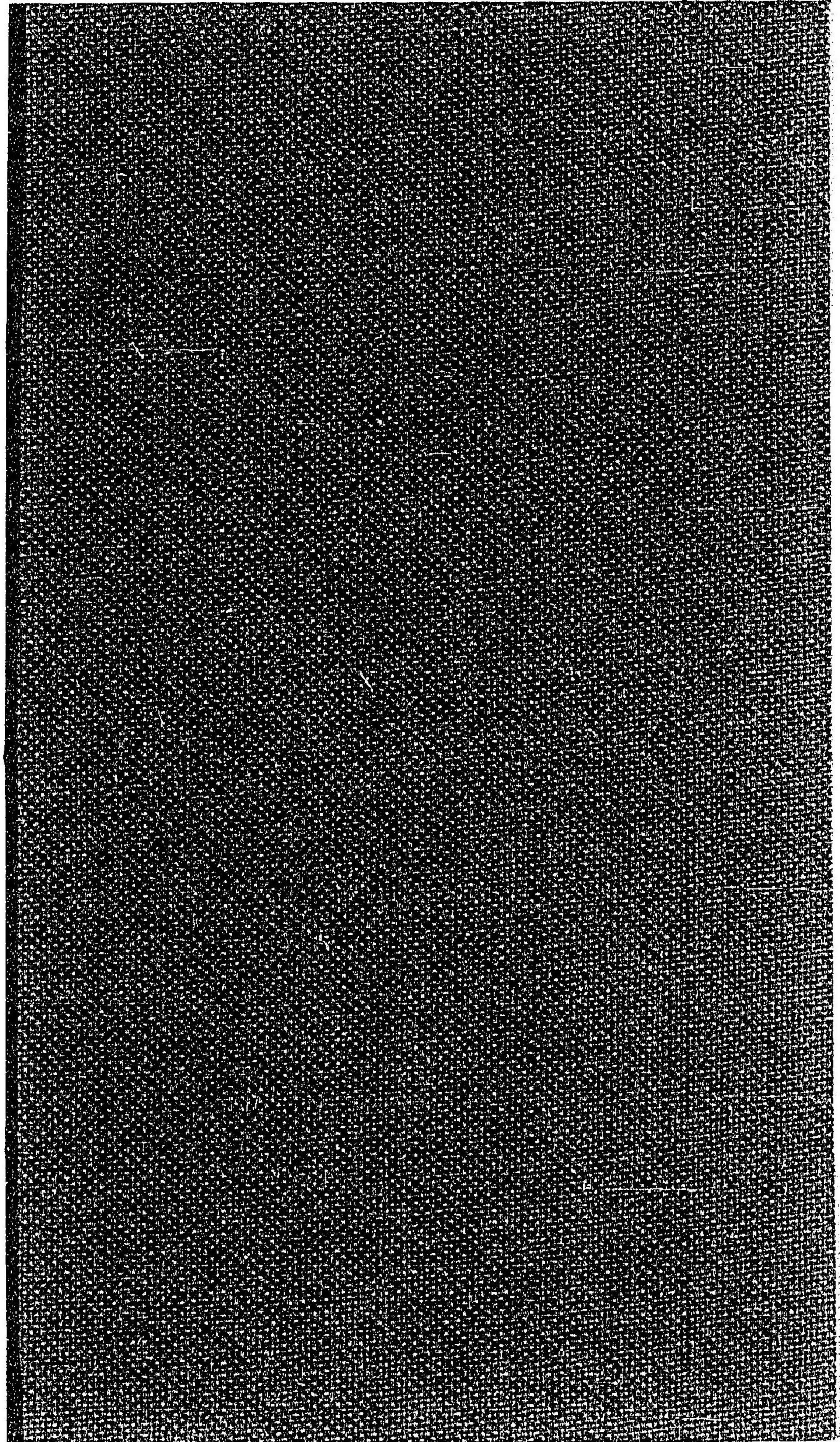


21307











38

64

035966-000-8

38-64

刑法論綱

富井 政章/述

M22

BBP-0567

